潮　流

国際収支の構造変化が示す二つの可能性

最近のわが国経済低迷に関する海外論評のなかに、金融システム不安と過大な政府債務という類似性を指摘してアルゼンチンと同一視する見方がある。しかし、アルゼンチンの場合、歴代政権が高インフレ抑制のために為替政策に苦慮してきたこと、また公的債務を中心に対外債務が約1500億ドルと多額に達し、この利払いを主因に所得収支の大幅赤字から国際収支（経常収支）赤字が恒常化しているのに対し、わが国では物価は低下傾向、経常収支はかなりの黒字基調を維持、対外純資産残高は133兆円（2000年末）にのぼり、世界最大の債権国となっている点で基本的に異なっている。

ただ、最近のわが国国際収支構造の変化や政策論議の混迷は、アルゼンチン化の予兆を感じさせないわけではなく、今後の行方には注意を要する。

国際収支の構造変化は、一つは輸出減少と製品輸入の増加を背景に、貿易サービス収支の黒字が減少傾向を続けていること。2001年の同収支黒字は、3.2兆円と85年以降で既往2番目の低水準に落ち込んだ。貿易黒字の縮小には、米国景気の後退に伴う循環的要因もあるが、わが国企業の海外への生産移転に伴う製品逆輸入の増加や競争力低下による輸出伸び悩みといった構造要因の影響もあり、2005年頃には黒字が消滅するとの見方もある。もう一つは、対外債権からの投資収入である所得収支が大幅に増加して貿易黒字を上回り、経常収支の黒字維持に大きく貢献していることである。

国際収支段階説によれば、各国の国際収支構造は経済の発展につれて、次の過程を経て変化するとされる。①未成熟の債務国（経常収支赤字、長期資本収支黒字）→②成熟した債務国（経常収支のうち貿易サービス収支の黒字化）→③債務返済国（投資収支は赤字だが経常収支は黒字化、長期資本収支赤字化）→④未成熟の債権国（投資収支黒字化、長期資本収支大幅赤字）、⑤成熟した債権国（貿易サービス収支赤字化）→⑥債権取崩し国（経常収支赤字、長期資本収支黒字）。これに即してみると、わが国の国際収支は④から⑤に移行しつつあることを示している。

このことは、わが国経済の将来につき二つの可能性を示唆している。一つは、④の段階維持の方向。このためには、自動車など競争力ある産業が健在なうちに次の競争力のある高付加価値産業の育成を図り、貿易サービス収支の黒字維持に努めることである。この方向を目指すならば、安易な円安誘導やインフレ政策ではなく、交易条件改善を考えるべきである。もう一つの方向は、かつての英国や米国のように、⑤の成熟した債権国としてのメリット享受追求である。対外投資収益の増加は、わが国企業の海外現法の高収益や対外証券投資収益の増加を示すものであり、投資の果実を確実に得るには相当の備えが必要である。それは投資先に対する情報収集と投資リスク管理の精緻化であり、それには米英のように情報産業としての金融サービス業の再生が不可欠である。いずれの方向を選ぶにせよ、準備にかけられる時間が限られていることは認識しておくべきである。

（理事研究員　荒巻 浩明）